

大教室でケアが必要な学生に「発信」を促すために — ミニットペーパーを応用したツールの試作 —

To encourage students who need care in large classrooms to communicate - Prototype of a tool that applies the Minute Paper -

可部 繁三郎

Shigesaburo Kabe

福井工業大学経営情報学部

Dept. of Management and Information Sciences, Fukui University of Technology

Email: kabe@fukui-ut.ac.jp

あらまし：大教室での講義において、勉強をしたいが何らかの理由で「勉強ができない」状況に陥っている学生に対して目配りができないか——。主に精神的な背景からケアが必要な学生に何らかのサインを教員向けに発信してもらうためにミニットペーパーを応用したツールを試作した。学生に質問を促す目的で使っているミニットペーパーに、不安などを書き込める機能を持たせることで、ケアが必要な学生が日常の講義時にサインを出しやすいう工夫した。大教室を心理的に安全な場と感じてもらうのが狙い。
キーワード：大教室，ケア，不安，ミニットペーパー

1. 大教室でケアが必要な学生

本研究では、大学における大教室における講義で、ケアが必要な学生に対し、それなりの目配りができないかという問題意識から、そうした学生から何らかのサインを発信してもらうためにミニットペーパーを応用したツールを試作した。

大学生は主体的に学び、自己成長を実現していくことが期待されるが、一方で、アイデンティティの確立、親からの自立といった思春期青年期の課題に直面する時期でもあり、大学入学に際しての環境変化、卒業後の職業選択などに直面し、不適応を起こす場合も少なくない⁽¹⁾。大学の講義は大教室の割合が多く、学生にとって「自分の席」のような場所はなくなり、教員も学生の顔と名前が一致することは少ない。ある学生が小・中・高校で授業中に特別な教育的ケア⁽²⁾を必要としなかったとしても、同じ教室で互いに顔見知りの教員とのやり取りが大学ではなくなってしまうため、「勉強をしない」状態になる場合も予想される。それは心理的安全性⁽³⁾の観点から考えると小・中・高校時代に比べて、大教室において、安心して学びを享受できないという状態に陥っている可能性、すなわち「勉強しない」のではなく、精神的な理由から「勉強ができない」状態に陥っている可能性が考えられる。

本研究は、心理や看護・ケアなどについての知識が乏しい普通の教員であっても、大教室で講義をしながら、「勉強ができない」状態の学生のサインを見出す可能性がないかどうかを考察する。鍵となるのは大教室での講義の際、ケアが必要な学生からサインを引き出せるかどうかである。そのための方法として、本研究はミニットペーパーの応用を試みる。

2. ツールの試作

筆者はミニットペーパーを日常の講義で、学生の

質問をする力を育てる目的から利用している。A4 サイズで自作しており、毎回の講義終了後に回収して、翌週の講義の際に全員が書き込んだ内容と教員のコメントを一覧化してフィードバック (FB) している。

日常的に使っているミニットペーパーを応用したツールの開発を目指した理由は、何らかの精神的な理由で「勉強ができない」学生も、日によっては講義内容について質問したいことも考えられるためである。さらに、「心配事がありますか？」というアンケートを別途実施しても、答えにくかったり、返答をすること自体が目立ってしまうことを懸念したりするかもしれない。常時使用している講義用のツールに、タイミングが合えば「心配事など」を書き込めるようにすることで、ケアが必要な学生が発信する場合に少しでも安心感を覚え、発信のハードルを下げてもらうのが狙いである。すなわち、

*用途1 [通常のミニットペーパー (質問をする力を育てる)]

*用途2 [勉強をしたいのに、「勉強ができない」状態の学生にサインを出してもらう]

の両方を念頭においた設計とする。

2.1 対象者

新開発のツールを適用する対象者として、環境が大きく変わる1年生および、就活を意識して将来への不安を感じるかもしれない2・3年生を想定した。

まず、1年生については、一般教養科目が多く、講義に関する質問や感想などが書きづらいことが予想されることから、通常のミニットペーパーとしての使い方が想定しにくい。教員のコメントを付けて全員にFBする必要もないため、シンプルな質問を1つだけ記すこととした。具体的には、「授業についてでも、授業以外のことについてでも、いずれでも構わないので、心配したり、気になったりしていることがあれば、自由に書いて下さい (なければ空欄のま

ま提出)」という幅広い尋ね方にした。

これに対し、2・3年生の場合は専門科目が中心なので、通常のリポートペーパーとしての用途1の使い方と、サイン発信向けとしての用途2の使い方を併用した。用途1は学生が書き込んだ疑問や感想などに教員のコメントをつけて一覧化してFBするため、用途1と用途2の書き込みスペースを峻別する必要がある。2・3年生向けは以下のような設計上の工夫を施した。

2.2 設計上の工夫

用途1と2の書き込みスペースを分け、枠線の色も変えることで、一目で識別できるようにした(図1)。まず、用途1向けスペースは、学生が疑問や感想などを書き込むためのもので、黒枠で囲む。そして、「今日の講義に関する感想・質問・コメントの記入欄」と記載している。さらに、「→[黒線枠内]皆さんの書いた内容を全て一覧化し、教員のコメント付きで次週に配布する」と明記した。この部分の文字は黒色(一部赤色で強調)で書いた。

これに対し、勉強をしたいが精神的な理由で「勉強ができない」学生にサインを出してもらう用途2については、用途1の黒枠の下に、青色で囲った専用スペースを設けた。そこには、「授業以外のことで、心配したり、気になったりすることがあれば、自由に書いて下さい」と記している。さらに、「→[青線域内]書いた内容は一覧化せず、教員からコメントがある場合は個別に返す」と明記し、一覧化FBの対象外であることを明確にした。見た目でも区別できるように、この部分の文字は全て青色で書かれている。

細かい工夫として、学生の記入は手書きで統一した。スマホなどでは過激な文言をその場の感情で書きなぐって送り付けるということが起こりえるが、紙に書くという作業は原始的な反面、内容を読み直し、感情を落ち着かせることが期待される。また、教員以外の人間に書いたことを読まれるリスクを避けるため、講義終了後に教員に直接提出してもらう。

2.3 教員の対応

新開発のツールに学生が心配なことや気になっている点などを書き込んだ場合、教員自身がコメントできる範囲であれば個々の学生にコメントを返す。心配事の程度が大きかったり、教員の手にも負えない内容と思われたりしたら、学生生活支援担当の学内部署につなぐ。個々の学生にコメントを返す場合は、大勢が見ている前でのFBは当該学生が嫌がるかもしれないので、チャットやメールで返す。

3. まとめ

2025年度春学期の講義から筆者が担当する科目などの講義において、新開発のツールを用いて、講義の際に学生から寄せられるかもしれないサインを受け取ることができるかどうかについての試行を始めた。ケアが必要な学生が大教室にどのくらい存在するのか不明であるが、大教室において孤立してし

まい不安感などを持っている学生に対して、心配なことがあっても教員はちゃんと聞く耳を持っていることを、日常の講義で使用するミニットペーパーを通じて示すことで心理的に安全な場を作る⁽³⁾という狙いもある。

大雑把なイメージを言えば、同じ日本語で講義をしても、ネイティブの日本人と来日間もない留学生では、勉学の意欲は同じでも、講義内容の受け止めには多少の違いがあるかもしれない。同様に、ネイティブの日本人学生であっても、大教室でケアが必要な学生とそうでない学生では勉学の意思が同じでも受講姿勢や講義内容の受け止め方に多少の違いがあっても不思議ではないと考えている。ツールに対する学生の反応を見ながら改善をしていきたい。

退出時に提出してください。

出席票	
科目： 担当：可部繁三郎	
月 日 ()	学籍番号
経営情報 学科 2年	氏名
今日の講義に関する感想・質問・コメントの記入欄(なければ空欄のまま提出)。 →[黒線枠内]皆さんの書いた内容を全て一覧化し、私のコメント付きで次週に配布します。	
授業以外のことで、心配したり、気になったりすることがあれば、自由に書いて下さい。 →[青線域内]書いた内容は一覧化せず、私からコメントがある場合は個別に返します。	

図1 ミニットペーパーを応用したツール(2・3年生用)用途1, 2のスペースを異なる色の枠線で囲み、識別しやすいようにした。

参考文献

- (1) 三宅典恵・岡本百合(2015)「大学生のメンタルヘルス」『心身医学』55(12):1360-1366.
- (2) 文部科学省(2022)「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」
https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/2022/1421569_0005.htm?utm
- (3) エイミー・エドムンソン『チームが機能するということはどういうことか』(2014)英治出版.